

唐王朝の天子たちの書

太宗のあとの天子たちは、二王を典型として行草書を書いたが、直接手本にしたのは太宗の書であった。天子たちの書は二王の書を基本にしているが、それは、王羲之を酷愛した太宗の影響からであったと思われる。しかし、二王の伝統の崩れは、すでに欧陽詢、褚遂良、欧陽通らの書に見られるだけでなく、王朝の内部からも次第に崩れつつあった。それは天子たちが王法の書以外に、好んで篆隸書を書いたことに表れている。

景龍観鐘銘 (唐・睿宗 景雲二年 (711) 楷書。鐘に刻されている。全 292 字。篆隸の筆勢や雑体書が見える。

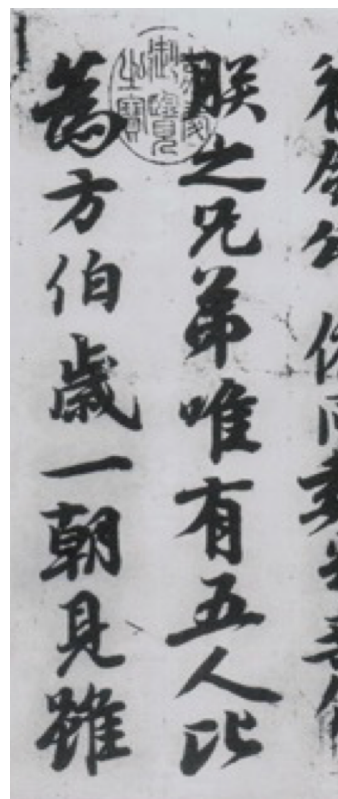


明之
發状

玄宗 (685—762) 在位は (712—756)

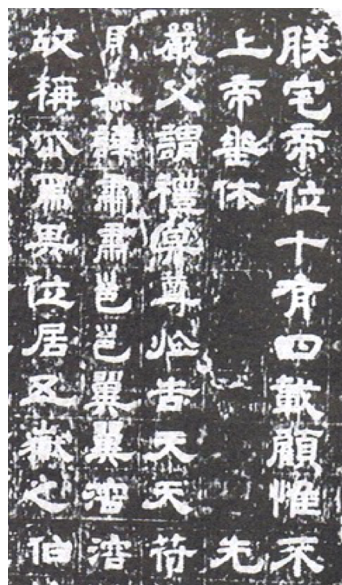
唐の第6代皇帝。睿宗の第3子。諱は隆基。在位45年のはじめは「開元の治」とよばれ、善政を敷き、唐の最盛期をもたらし、文化の爛熟、天下太平の世をつくりだした。開元の治は姚崇や宋璟ら優れた宰相に恵まれたことによってもたらされた。しかし、玄宗は後半生、政治に飽き、墮落して、動乱の世をまねき、唐朝滅亡の原因をつくった。737年に寵妃の武惠妃が死に、740年に楊貴妃に出会ってから後、唐朝は坂道を転げるように破局にむかう。

鵝鵠頌 (唐・玄宗)



紀泰山銘 (唐・玄宗 開元14年 (726) 磨崖碑 隸書

玄宗は唐の隸書のスタイルを確立した。たつぷりとした太い点画で、波磔を強調している。



字大約14cm、996字、
高さ約13m 幅約5m。

玄宗が泰山に封禅したときに彫られた。
山東省泰山の東嶽廟の岸壁にある。

石台孝経 (唐・玄宗) 天宝4年(745) 玄宗独特の隷書。



楊貴妃 (719 - 756年6月14日)

玄宗皇帝の妃。蜀で生まれたらしい。庶民の出身か？ 名は玉環。傾国の美女と呼ばれ、世界三大美人、中国四大美人の一人とされている。音楽、歌舞に優れ、かしくおとなしく、かわいらしかったという。太っていたらしい。

開元23年(735) 玄宗と武惠妃の子の寿王(玄宗の第18皇子)の妃となった(16歳)。

開元25年(737) 武惠妃死去。

開元28年(740) 玉環、驪山の北麓にある、玄宗の避寒地の温泉宮(華清池)で女道士になり号を太真と名乗り、玄宗と内縁関係になった(21歳)。この後、毎年、冬を玄宗と楊貴妃はこの華清宮で過ごした。

天宝4載(745) 楊太真、貴妃に冊立される(26歳)。玄宗は61歳。

※「載」とは数の単位の一つだが、ここでは年(歳)のこと。「千載一遇」の載と同じ。「千載」は千年のことである「一遇」は一度出会う意。

天宝15載(756) 長安から逃げる途中、馬嵬(陝西省興平県)で縊死させられた(38歳)。



華清池



楊貴妃観音像 (泉涌寺)

唐代の後宮制度

後宮とは、宮廷内での天子の家庭生活の場所のことである。皇后以下、妃妾、多くの女官や宦官たちが暮らしていた。職官は内官(妃妾のこと) 官官(正六品以下の女官たちで、宮中内の職務にたずさわる) 内侍省(宦官たち)の三部門に分かれていた。内官は皇后を頂点にして以下の順位が決まっていた。

四夫人(貴妃・淑妃・德妃・賢妃・正一品 九嬪(昭儀・昭容・昭媛・修儀・修容・修媛・充儀・充容・充媛・正二品) 二十七世婦(婕妤9人・美人9人・才人9人・正三品・正五品 八十一御妻(宝林27人・御女27人・采女27人・正六品・正八品) さらに下に下級官女がつづく。

篆隸への関心

天子たち同様、一般にも篆隸への関心が高まってきた。李潮・韓擇木・史惟則など隸書の名家が現れ、つづいて篆書の大家である李陽冰が現れた。二王の典型が崩れてきた現れであると考えられる。

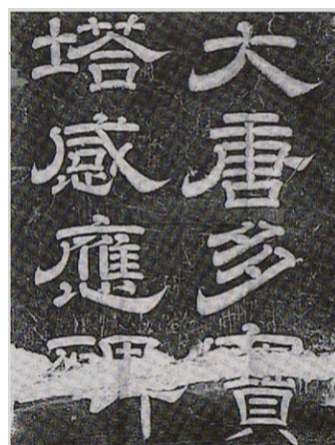
大智禪師碑（史惟則・開元24年）736年



崇陽親碑（徐浩・天宝3載）744年

唐代隸書の典型の一つと言われている。

徐浩は「多宝塔碑」の題額の隸書を書いている。



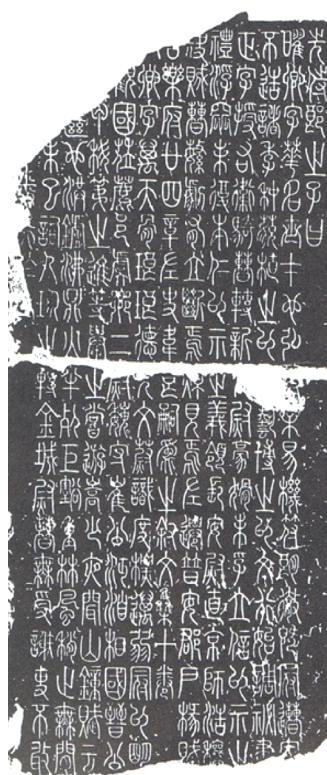
多宝塔碑題額
(天宝11年・752)

李陽冰生没年不詳（河北省の出身。本名は李潮。唐代隸書の名手で篆書の天才と称えられた。二王以前の篆隸の世界に戻り、

装飾的なデザイン文字に墮落していた篆書を、本格的な秦代の小篆に復活させようとした。李陽冰の後、篆書による本格的な書作品が創られるようになった。篆書を芸術として復活させた大芸術家である。李白の従叔（父の従兄弟・おじさん）と伝えられているが、関係がないようである。李姓は13系統あったらしく王、張と並んで最も多い姓であるらしい。759〜762年宣州当塗（今の安徽省宣城市）の県令であったとき李白を援け、762年11月自分の家でその死を一人で看取り、ばらばらになって残されていた詩稿を詩集『草堂集』10巻に編纂し、その序文も書いた。いま、李白の詩が読めるのは、李陽冰のおかげなのである。

李氏三墳記（767）小篆「三墳記」とも呼ばれる。李陽冰の親戚であった李曜卿たち三兄弟を讃えた墓碑銘。装飾化されて崩れた篆書ではなく、本来の篆書に近い謹厳な書風である。玉筋篆。210×82cm 碑陽は13行、各行20字。碑陰は11行、各行20字

西安碑林蔵



先侍郎之 曜卿字華

李陽冰は秦の李斯の嶧山刻石の法を学んでから後30年間、小篆だけを追究し一家をなしたと伝えられている。また、篆書の古碑や許慎の『説文解字』を参照して秦代の小篆を復活させようとしたらしい。



嶧山刻石（模刻）

般若台題記（772）小篆 「般若台銘」とも呼ぶ。全24字だが、原刻として残る貴重な作品である。福建省

福州の烏石山の絶壁に在る磨崖碑。内容は寺院名と建立者の名前を記したもの。秦代の篆書のような格調の高い本格的な書風である。唐代の篆書を伝えるたいへん貴重なものである。



滑台新駅記（774）小篆 明初に重刻されたもの。火事で焼失した滑州駅の再建の状況を記したもの。



崔祐甫墓誌蓋記（780）篆額部 65×65 cm が李陽冰の玉筋篆である。

4行、各行3字。原刻で貴重な作品である。開封市博物館蔵。



顔氏家廟碑の篆額（780）



顔真卿 709ー785 字は清臣

顔平原・顔魯公とも呼ばれる。琅邪臨沂

(今の山東省臨沂県)の顔氏の出身。生ま

れたのは長安。先祖は孔子の十大弟子のひとり顔回(顔淵)と言われる。代々訓詁と書法を家学とする名家の出身である。顔氏は学者、能書家の家系から「字家」と言われた。五代の祖・顔之推は『顔氏家訓』を著した。之推

の孫の顔師古は『顔氏字樣』を著し、また孔穎達らと『五經正義』を撰した。曾祖父の顔勤礼は訓詁に詳しく篆・籀に工み。祖父の顔昭甫は訓詁

に明るく篆・籀・草・楷に工み。父の顔惟貞は草・楷で知られ。伯父の顔元孫は『千祿字書』の著者で草・楷が工み。兄の顔允南は草・楷に工みであつ

た。顔真卿は早く父を失つたので伯父の元孫と兄の允南と母の殷氏の三人から教育を受け成人した。734年進士に合格し、玄宗・肅宗・代宗・徳宗に

仕えた。「忠義の人」「剛直の人」といわれる。剛直のためか、時の宰相らに嫌われ何度も左遷された。訓詁の学に長じ、礼制に詳しく、詩文をよく

した。その書は「顔法」と言われ、王羲之の「王法」と肩を並べている。漢・晋以来の伝統書法を一変したといわれる。伝統派(古法)に対する革新派(新法)の書家である。代表的な碑誌は20種、その他の碑帖100種以上が『顔

真卿志』に載っている。張旭に筆法を学んだと言われ、書論に『張長史十二意筆法記』がある。逆臣李希烈により殺された。たいへん劇的な最後であつたと伝えられている。忠臣の典型として幕末のベストセラーの『靖献遺言』

に載せられ勤皇の志士に尊敬されたようである。

※「訓詁」・古代の言語を解釈すること。「訓」は解釈、「詁」は古語の意。「訓詁学」は語の意味を研究する分野の言語学。

顔真卿の書は、前期(50歳以前)中期(50〜65歳)後期(65歳〜)に分けられる。

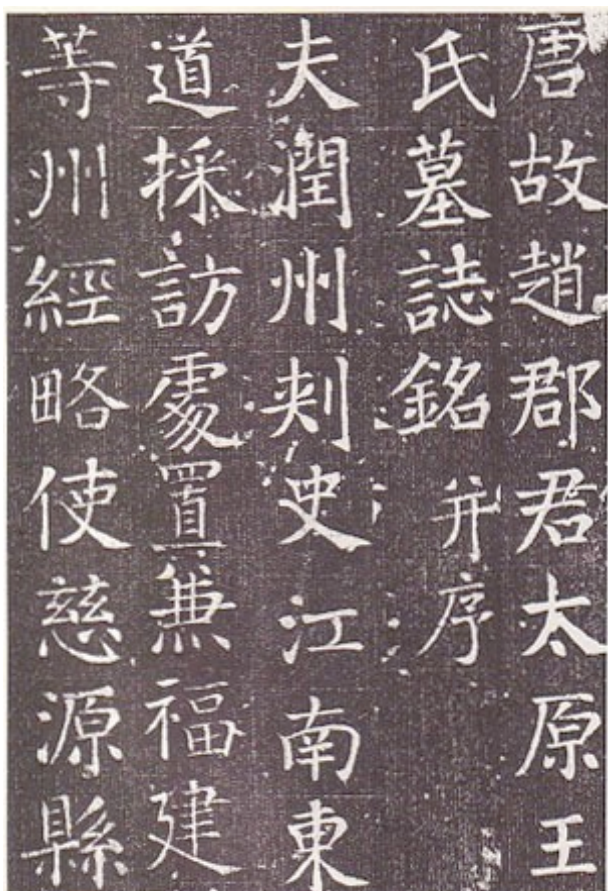
王琳墓誌(741・開元29年)

33歳の現存最早期の楷書。

2003年洛陽龍門鎮張溝村の工事現場で出土した。

32行、満行32字、全913字 約90×90cm

初唐の三大家の影響が大きな作で顔法はまだ見えない。



郭虚己墓誌(天宝9載・750)

楷書

42歳

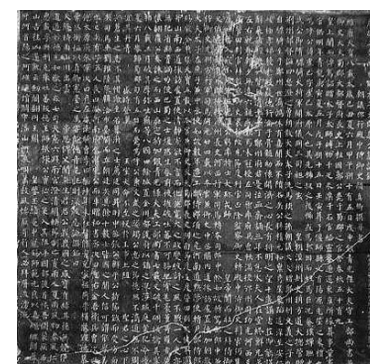
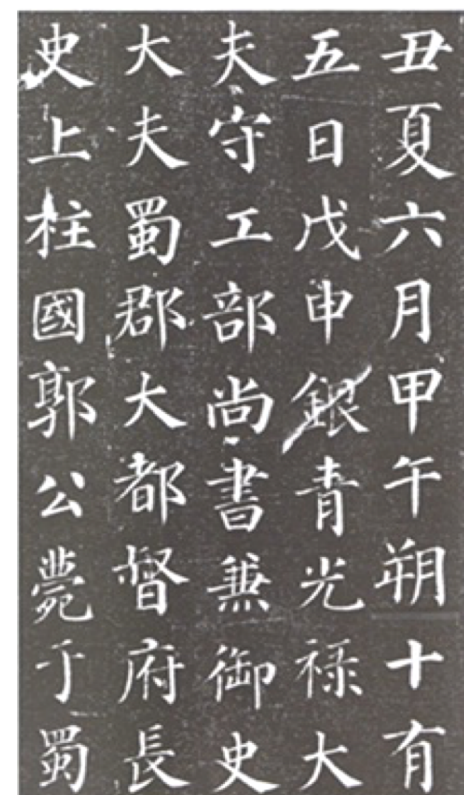
1997年河南省偃師首陽山で出土。

42歳の楷書。

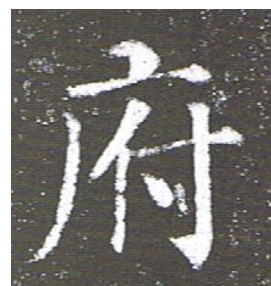
107×104cm

35行、

満行34字、全1150字 撰文・書 顔真卿 顔法の特色が少し見られる。偃師商城博物館蔵
結構は堅実、線質に骨力がある。



磔法(右はらい)に
少し燕尾の気配が
見られるが、ほとん
どの波法は普通で
ある。



多宝塔碑（大宝 11 載・752）楷書 44 歳 楚金禅師が長安の千福寺に舍利塔を建立した経緯を記した碑である。岑勛（しんくん）の撰。題額は徐浩の隸書。34 行、満行 66 字、全約 2000 字。碑高は約 239 cm、幅 127 cm、亀趺（きふた）があり、全高は 3 m に近い。文字面の全拓整本は約 185 × 97 cm である。この碑は、もと陝西省興平県の千福寺にあったが、今は西安碑林にある。

大唐西京千福寺多寶佛
塔感應碑文
南陽岑勛撰 朝議郎
判尚書武部員外郎琅
邪顏真卿書 朝散大



整本

特徴

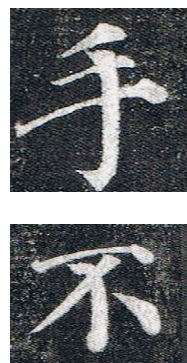
燕尾の萌芽



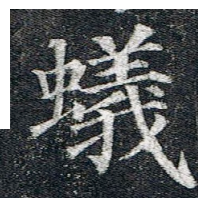
左払いを細くして右払いを太くする



横画が藏鋒になっているものがある



横画の収筆の按筆



さんずい（楮法に似ている）



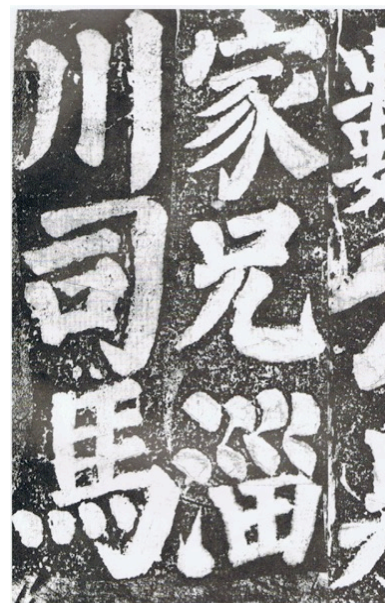
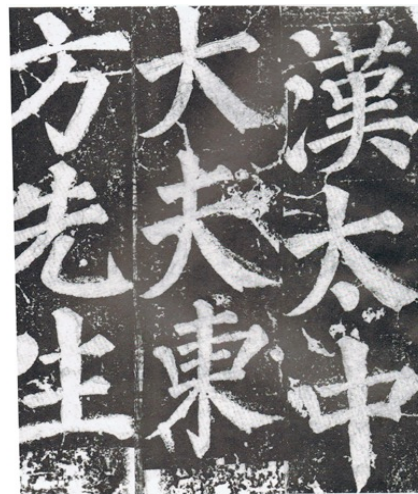
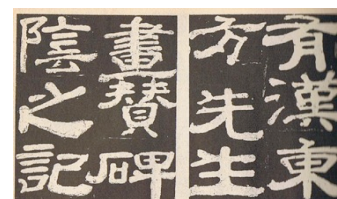
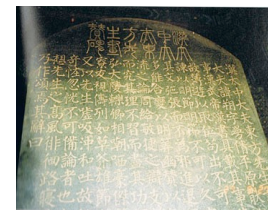
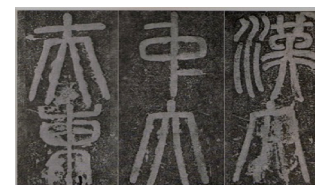
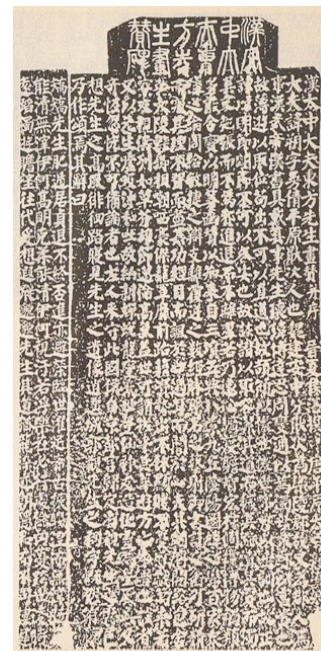
向勢・背勢の字形



とうほうさくがきん
東方朔画賛（天宝 13 載・754・12 月） 楷書 46 歳 撰文も題額も顔真卿、表は篆書で陰額は隸書 碑は四面刻で碑陽、

碑陰ともに各行 15 行、両側は各行 3 行、各行 30 字。261×102 cm。山東省陵県の「文博苑」に現存する。

顔真卿が楊国忠に左遷され、平原太守に任じたときの書である。東方朔画賛とは、漢の武帝に仕えた東方朔という奇人の肖像画に西晋の夏侯湛が賛文を加えたものをいう。「安史の乱」前夜の作品。この作品によって、顔真卿は王羲之の典型から脱し、個性的な顔法を発見したと思われる。



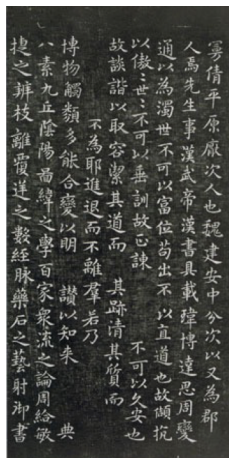
新しい用筆法 直筆主体の肘腕法で書いたと思われる。王法は指掌法ししょうほうといい腕だけでなく指も動かし、

筆を八方に動かす方法だったと思われる。どちらも蔵

鋒を基本とする。顔真卿は顔家の伝わる篆・籀の筆法

や李陽冰の影響を受けて篆法を取り入れた。それは、

古代復興の時代精神の表れだったと思われる。



王羲之の小楷
「東方朔画賛」(356)